学校研究の概要　　四十万小学校　　令和６年度

１．研究主題及び副題

『生き生きと学び合う子をめざして』

―　子ども自身が学びを実感できる授業づくり　―

２．主題・副題設定の理由

本校の教育目標は「自ら学び心豊かでたくましく生きる子どもの育成」である。教育目標を受けて、めざす児童像「人と関わり、自ら学ぶ子」「自分を、人を大切にする子」「人のために自ら行動する子」が設定され、それぞれのめざす児童像実現のため、学習指導部会・生徒指導部会・特別活動指導部会の各部会と連携を図りながら研究と実践が積み重ねられてきた。

本校の児童は、学習課題に対して見通しを持って取り組むことはできるが、自分の考えを持ち表現したり相手の考えを聴いて自分の考えを深めたりすることが苦手な傾向がある。また、自分たちで授業をつくっていくという意識が弱く、受け身になってしまう子がまだ多い。昨年度から聴き合いの充実を図り、子ども自身が学びを実感できるように取り組んでいるところである。子ども自身が、授業に対して主体的に取り組んだり積極的に友達と関わったりできるようになるには、やはり学びを実感することが大切である。学びを実感する喜びが学習意欲の向上につながり、生き生きと学び合う子が増えていくであろう。つまり、子ども自身が学びを実感できるとは、単元を通してつけたい力が身につき、そのことを子ども自身が実感することである。そして、そのことが「生き生きと学び合う子」の育成につながっていくと考える。昨年度は、研究主題『生き生きと学び合う子をめざして』のもと、副題を「子ども自身が学びを実感できる授業づくり」とし、手立て①「わかる・できる」ようにするための工夫、手立て②「わかった・できた」を実感させるための工夫として研究に取り組んできた。

手立て①「わかる・できる」ようにするための工夫については、単元のつけたい力を明確にした上で、本時のゴールを子どもと共有したり学習履歴を活用したりすることで、見通しを持って学習に取り組むことができた。考える場面では、個別最適な学びへとつなげるために、ノートやタブレット、ワークシートなどから自分に合った方法を選択させる機会を設けることもあった。さらに、学校の共通実践として、考える場面で丁寧な机間指導を行い、深める場面で「聴くマグネット」を使って聴く視点を与えて、考えの伝え合い・深め合いの場面の充実を図ってきた。丁寧な机間指導を行うことは、子どもの意欲を高めるだけではなく、本時のねらいに迫るためのヒントを伝えることで、自分の考えを持たせたり考えを整理させたりする手立てとして有効であった。また、考えの伝え合い・深め合いの前に、「聴くマグネット」で聴く視点を与えることで、子ども自身が目的意識を持って学ぼうとする姿が見られ、協働的な学びへとつながっていった。しかし、共通実践として行ってきた机間指導では、本時のねらいに迫るために教師が具体的にどのような指導をすればよいのか曖昧なままの場合があった。子どもがどのような考えを持つか想定し、本時のねらいに迫るためにどう声かけしていくか、もっと吟味する必要があった。「聴くマグネット」の活用でも、聴くことを意識させるだけではなく、どんな聴き方をすれば本時のねらいに迫ることができるのか教師がより深く教材研究し「聴くマグネット」の効果的な活用を探っていく必要がある。また、ねらいに合った「聴くマグネット」を提示していたとしても、提示しただけで終わって

しまい、子ども自身が考えが深まったと実感できるような評価が十分にできなかったという課題も残った。

手立て②「わかった・できた」を実感させるための工夫では、発達段階に応じた方法でまとめやふり返りを書かせることで、子どもに学びを実感させることへとつなげていった。また、本時のつけたい力に合った適用問題に取り組んだり、相互評価をさせることも取り入れたりすることができた。課題としては、適用問題が本時にねらっていたものと合っていない場合もあり、学びを実感させることにつながったといえないことがあった。さらに教師の考える視点や話し合う視点が曖昧なままになると、まとめやふり返り、相互評価の視点も曖昧になってしまう場合もあった。「わかった・できた」を実感させるためには、授業の導入から展開で行われる手立て①の「わかる・できる」ようにするための工夫が、本時のねらいにあった効果的なものでないと、手立て②でどのような工夫をしても学びの実感へとつながらないと考えられる。今後、学びを実感させる授業を作っていくには、手立て①の取り組みの質を向上させて、手立て②につなげていくことが必要である。

子ども達が生き生きと学び合いをするには、子ども自身が学びを実感できるような授業を教師が日々行っていくことが大切である。そこで、今年度も研究主題を「生き生きと学び合う子をめざして」、副題を「子ども自身が学びを実感できる授業づくり」とする。そして、そのような授業をつくるために、単元を通してつけたい力を設定し、手立て①「わかる・できる」ようにするための工夫として、授業の導入から展開場面における、机間指導の充実と聴く視点の明確化に絞って取り組み、学び合い・深め合いの充実を図っていきたい。本時のねらいに迫るためには、どのような机間指導が効果的なのか、聴くマグネットをどのように活用したら「わかる・できる」につながるのか、今年度の課題を基に取り組みの質を上げていきたい。そして手立て②「わかった・できた」を実感させるための工夫として、授業の終末場面において手立て①で明確化された視点が生かされ、本時のねらいに到達したと実感できるように、より効果的で具体的な方法を探っていけるように研究を進めていきたい。

※つけたい力・・・本校では、目の前の子どもの実態を踏まえ、**カリキュラムの単元目標**をもとに、**どんな力をつけるのが生きる力につながるのか考えて**、授業者がねらう力とする。

３．研究内容

「子ども自身が学びを実感できる」とは、単元を通してつけたい力が身につき、そのことを子ども自身が実感することである。そこで、単元を通してつけたい力を設定し、手立て①と手立て②を１時間の授業の中で行い、授業のねらいが達成され、それらが積み重なることで、単元を通してつけたい力が身につくと考える。子ども自身が学びを実感できるように、単元を通してつけたい力を設定し、手立て①では、授業の導入から展開場面において授業でつけたい力について「わかる・できる」ようにするための工夫を行う。手立て②では、授業の終末場面でつけたい力について「わかった・できた」を実感させるための工夫を取り組んでいく。

『生き生きと学び合う子をめざして』
－子ども自身が学びを実感できる授業づくり－

★単元を通してつけたい力を設定する
- つけたい力の明確化
- 重点単元の設定
- 単元のゴールの意識付け
- 学習計画・成果物の掲示
- ゴールのマグネットを使用し、本時のねらいの明確化

つかむ

☆手立て①「わかる・できる」ようにするための工夫
- 丁寧な机間指導
- 「聴くマグネット」の効果的な活用

等

考える

相手の考えを分かろうと、

？(はてな)や！(なるほど)を見つけながら聴く力の育成

まとめる

☆手立て②「わかった・できた」を実感させるための工夫☆

わかった・できた

学びを実感

生き生きと学び合う子